

明治中期の北海道における開拓農場主住宅について

—函館近郊上磯町の旧神山繁樹邸からみえてくること—

川 島 智 生

Research of Development Rancher House in Hokkaido in the Middle of the Meiji Era

—Seeing from Old Koyama Shigeki's of Kamiiso-cho—

KAWASHIMA Tomoo

Abstract

It is a thesis that analyzed Koyama Shigeki's house constructed in 1896 age in Kamiiso in Hakodate suburbs from the viewpoint of an architectural history. This house exists now. The locale was surveyed in this research, and the in-house probe and the measurement survey also executed it. It was constructed with Koyama Shigeki's house as farm proprietor's home. These houses are two stories per wooden one. It is located with one of the combination of Japanese and Western-style houses as the Western-style room is arranged over plurals though the plane is a transformation of the character type of Tanoji. The externals style is due to a European style design of clapboard Cho's stick style. A sense of beauty Japanese style as the possession sending of a Japanese style design is clearly distributed there is seen. A pseudo European style stem is caught if it thinks like that. The design is due to the same carpenter chief as construction.

キーワード：明治建築、開拓農場主住宅、洋館、和風建築、函館

Key words: Construction at the Meiji era, Development rancher house, European-style building, Japanese-style building, Hakodate

序

日本の近代が欧米化の歴史でもあったことはよく知られる。その進展の度合いは地方や地域によって異なったが、明治期に先行したのは居留地を有した開港都市だった。開港都市には函館・新潟・江戸・横浜・大坂・神戸・長崎の7つがあったが、つとに建物の洋風化が進捗したのは横浜・神戸・函館・長崎の港町であった。そのなかで最も古い形状をとどめるのが、函館である。開港都市のなかで函館は「蝦夷地」ゆえに近世期までのしがらみが最も少なく、建物の洋風化は短期間で進行する。そして近郊の集落にもその新スタイルはたちまち伝播する。けれど東京以北において、最も大きな都市であった函館は昭和戦後急速に寂れる。その結果、戦前期までの時代の都市景観が温存され、経済力を反映した数々の名建築が残ることになる。このことが経済的停滞とはさかしに町の魅力を形成した。

ところが、である。近年は函館栄光の遺産ともいべき歴史的建造物の解体が加速され、筆者が研究した昭和戦前期につくられた弥生小学校校舎は本年6月から解体がはじまる。また古い木造建築は修復が可能な時期が過ぎて部材の腐朽を生み、急速に姿を消しつつある。

このような現状の中、函館近郊の上磯町（現、北斗市）には114年前の明治29（1896）年に建設された開拓農場主の住宅が現存する。旧・神山繁樹邸である。神山繁樹とは函館が生んだ郷土史家・神山茂の祖父にあたる人物で、元会津藩士であった。

これまで知られることの少なかったこの洋風住宅を、筆者は実測する機会を、昨2009年5月上旬に得た。長い年月の間に荒廃は進み、一見廃屋になった感すら漂うが、現在も地元の建設会社の倉庫として使用されている。ここでは旧・神山繁樹邸の建築調査をとおして、浮上してきた特質を論じる。

この建物についての研究は管見の限りにおいては見出せていないが、北海道建築士事務所協会函館支部が刊行した写真集『渡島の古建築』¹に写真と簡単なコメントが掲載されている。また施主である農場主・神山繁樹については『北海道開拓五十年史』²ならびに上磯町在住の郷土史家・落合治彦による紹介文³がある。

ここでは、明治期北海道の住宅建築の意義を外観の洋風意匠や田の字型の間取り、施主である神山繁樹の足跡などの観点から考究する。

1章．神山繁樹邸の建築特徴

最初見たときの印象は、近い将来にこのまま朽ち果ててしまうのではないかという危惧だった。100年以上の歳月が経過し、この建築を構成する部材の過半は腐朽し、屋根や壁からは雨が入る状態にある。今、修繕補修をしなければ原型が保てなくなるとも思われた。いずれにしても、オリジナルの状態を見ることができる最後の時期だろう。まず「もの」としての考察からはじめる。

1 節. 外観意匠

①屋根

木造で一部が2階建ての建築である。屋根の形状からみれば、主屋の屋根全体は切妻造だが、2階屋根は寄棟となる。玄関部ならびに勝手口部、突出した便所は切妻造となり、南西側のL型になった広縁部分の屋根は下屋状に架けられる。このように、屋根の形状が切妻造を基調としながらも、各部はおのおの付け加えられたような形状になっていた。

とりわけ2階部分は建物全体を飾る、いわば塔屋のような目的で設けられたとも考えられる。その証拠に最も目立つ軒下には四周ともに910mmピッチの小刻みに入れられた持ち送りが備わり、その間には装飾板飾りが付く。また軒裏には菱型に組子が入れられる。このようにあきらかに見られることが意識されて、軒下廻りには集中的に装飾が施されている。同様の手法は道路に沿った南東側の1階軒下廻りにも施されており、そこでも持ち送りならびに装飾板飾り、軒裏の菱組格子が備わる。

屋根は現在相当に錆び付いているが、鉄板の菱葺である。その下地には下葺として、杉皮や檜皮などの薄く削いだ木皮が敷かれる。北海道では桎葺という木板を屋根材とする手法が鉄板屋根が成立する以前にはよく用いられたが、ここでは建設時にどのような葺き方が採用されていたのかは定かではなく、現在は鉄板葺きとなる。

和室側は入母屋屋根となり、社寺建築にみられるように出隅部には隅木が挿入され、少し屋根にそりが入れられている。隅木の先端、鼻の部分は装飾が施された銅板で巻かれ、化粧垂木がつく。一方で縁軒は磨丸太が組まれ、木口は銅板で包みこまれ、数寄屋の手法もうかがえる。

2階小屋組は未見だが、1階台所等の天井の様態から推量すれば、和小屋によるものと考えられる。

②外壁

全体は下見板貼仕上げで、玄関のある正面南側と勝手口のある東側はオイルペイントが塗られるが、和室がある西側は木地仕上げのままとなる。背面の北側は現在波形鉄板貼りとなるが、後世の改修によるものだろう。ここには竣工時にはオイルペイントが塗られていたかどうかは判らない。2階では四周の壁面がいずれもオイルペイント塗りとなる。ここから読み取れることは、洋風の部分にはオイルペイント仕上げ、和風の部分はオイルペイントが施されない木地仕上げとなる。このような使い分けは明治期の北海道の住宅ではよくおこなわれた手法で、通りからみえる側ではオイルペイント仕上げ、背面は木地仕上げとなった。すなわち外観のとりわけ目立つ場所だけが、値段の高かったオイルペイント仕上げという図式になっていた。

全体のスタイルとしてはスティック様式のなかに位置づけられる。スティック様式とは明治維新直前の1865年頃アメリカ東部で流行した建築スタイル⁴であり、力強い破風飾りが特徴とされる。この住宅では玄関妻部にタイバーや短い水平ビームを模した形状の装飾が取り付けしており、スティック様式の特徴に符号する。

③意匠

意匠的な特徴は2階軒下の持ち送りと玄関ポルティコの妻部の破風飾りにある。前者からみると、その意匠は雲肘木二段の繰り型による。これは社寺建築の手法である^{くりだし}彫刻であって、持ち送り単体の造形意匠は和風に則るものである。だが、このように軒下を連続した化粧持ち

送りで飾る手法は、これまでの伝統的な和風スタイルにはなかったもので、あきらかに洋風建築の影響を受け出現したものといえる。

後者の妻部破風飾りは外壁の中でみたようにアメリカで流行したものである。すなわちこの2つの事象からは明治前期に流行した、和風でも洋風でもない、擬洋風スタイルにあったことが読み取れる。つまり擬洋風とは高等教育を受けた建築家が出現した明治中期以降急速に消えていったものであったが、明治中期においても大都会の中心部以外では連綿とつくり続けられていたことが判明する。

2節. 内部の様態

正面玄関から中に入れば、玄関土間は4帖半の大きさで、正面は式台風に4段上がり、1階床レベルになる。玄関土間から東側の洋室（図面には便宜上1と記した）には土間のレベルで繋がる。その扉は明治建築らしく幅の広い額縁によって縁取られる。建具も額縁も素木仕上げとなる。天井は狭い間隔で貼られた棹縁天井で、そこでは天井板が意匠として斜めに配された。

洋室1はおそらくは帳場であって、事務室と応接室の機能が担われたものと推測される。この洋室には玄関ホールからも扉で繋がっており、ここからはこの洋間が土間のレベルの高さと、廊下も含めた1階床レベルの高さの、2つの高さの床が設けられていたことがわかる。

中央には東西方向に、中廊下が配されている。これは玄関ホール背面から勝手口を結ぶものだが、2階の階段にもつながっている。玄関ホールの西側には和室1があり、北には和室2、その東側には和室3が配される。和室2には床の間が設けられていた。和室3の隣にあるのが、囲炉裏のある10帖板間で、そこでは天井が貼られずに、梁がむきだしとなる。東側の台所も共通して天井裏表わしとなる。

1階の室内の仕上げは土壁の上に、砂漆喰が下塗りとして塗られ、上塗りが漆喰となる。和室の柱の釘隠は折り鶴が形取られている。

2階には二部屋があり、階段を上がりきった部屋は洋室となる。仕上げを見ていくと、壁は漆喰塗りで、廻縁は黒漆となる。天井には図柄の入った布が貼られている。特筆すべきは天井の高さで、3,180mmときわめて高い数値を示す。このことから椅子が使用されていた可能性が高い。すなわちこの部屋は1階の洋室1とは異なり、よりもてなしが必要な客人のために設けられた空間とも考えられる。ただ、ここへと登る階段は従来からある日本建築に特有の簡素なもので、洋風による手法は用いられていない。

3節. 平面の特性

この建物は平面図に示したように、玄関を南にして東西方向を長辺とする矩形の形状を示す。建物は東側が南に下がり、西側が北に上がるという建物の配置を示し、その角度はおよそ10度前後の傾きがある。大きさをみると、長辺方向、すなわち桁行き方向は15.650mm、短辺方向、梁間方向は10.015mmとなる。つまり間口が約8.7間、奥行き約5.6間の数値を示す。平面の数値を分析すれば、この建物の寸法体系は若干の差異はあるものの、概ね910mmからなる。作成した平面図の読解からは、2間（約3.640mm）×2間半（約4.550mm）の大きさをひとつのユニットとして、各室が構成されていることがわかる。柱の大きさは隅柱が150角、一

一般的な柱は120角となる。

1階は和室1、和室2、和室3、囲炉裏のある板間、台所兼土間、洋室1の玄関側の半間×2間を除いた部分と廊下、廊下を含めた女中室、洋室1の除外した部分に玄関土間・ホール・階段を合わせたもの、計8つのユニットからなる。繰り返すが、各ユニットの大きさは共通する。主体となる8つのユニット部から、玄関では1間×1間半の大きさが、勝手口では1間×半間の大きさが、便所では2間半×1間の大きさが、それぞれ外側に突き出た形状になる。また和室1と和室2の廻りには西側に5間半×半間、南側に半間×2間半の広縁が廻り、和室2から台所にかけての北側には半間×8間の押入などが取り付く。これらの付加部分を反映して、これらの屋根形状は主屋の切妻屋根とは違った形状となる。

2階では洋室2、洋室3ともに押し入れや階段を入れると、2間×2間半の大きさと合致する。すなわち2つのユニットからなる。1階と合わせれば、計10のユニットからなる。

西側の和室群や北東側の板間や台所土間の配置からは、全体的にはこのプランが田の字型を踏襲したものと捉えられるが、一方で玄関横の洋室や隣接する女中室の存在など、近世までの田の字型プランには見られなかったものも現れており、洋風化の影響を見ることもできる。

このようなプランは果たして大工棟梁と施主の知恵だけによって生まれたものなのだろうか。神山邸に最も似たプランを持つ住宅に、明治5（1872）年に札幌に建設された開拓使官舎、通称「ガラス邸」⁵と呼ばれた和風官舎があった。その平面図をみると、玄関を挟んで和室群側と台所土間の位置は逆になるが、きわめて共通項の多い間取りであったことがわかる。この建物が神山邸の間取り選定の際に、モデルのひとつになっていた可能性もある。開拓使官舎とは神山邸が建設される明治中期頃までは、北海道において最も豪華な和風建築であって、手本にふさわしい住宅建築であった。なおガラス邸は平屋造、神山邸は2階建と階数こそ違ったが、建物の規模は神山邸が60.44坪、ガラス邸は59.9坪と近似し、部屋数は前者が8室、後者が9室とほぼ共通した。また共に田の字型プランの変形のなかに、玄関ホールから中廊下が伸びるなど重なり合う点は多い。

4節. 和洋折衷の棲み分け

ほぼ近似した面積を示す。の西北部には便所が突出する。玄関は道路に面して設けられ、通常の出入りに使ったであろう勝手口が東側の庭先にある。玄関は破風飾りに洋風の装飾が取り付くが、勝手口は懸魚が破風板と一体化したものが備わっており、和風意匠である。日常的に使用される出入口は馴染みのある和風意匠で飾られ、正式な玄関は手の込んだ細工の洋風意匠となる。すなわち空間の違いによって、洋風と和風の使い分けがなされていたことが判明する。

次に建物全体をみると、玄関は建物全体の配置のなかでは少し西側に寄るが、玄関の南北方向を縦軸とすれば、西側が和室、東側は洋間や板間、台所、女中部屋といふかならずしも、畳敷きを必要としない空間となる。2階はすべて和室となる。西側には10帖の和室（1階平面図に記した和室1）、その北側には床の間付きのやはり10帖の和室（1階平面図に記した和室2）が、その東側には同様に10帖の和室（1階平面図に記した和室3）が配される。玄関ホールの階上は洋室（2階平面図に記した洋室2）となり、その西側にもうひとつ洋室（2階平面図に記した洋室3）が続く。2階は二部屋からなる。



写真1 外部1—全景



写真2 外部2—南東側外觀



写真3 外部3—東側面外觀



写真4 外部4—北背面外觀



写真5 外部5—玄関破風飾り



写真6 外部6—勝手口懸魚



写真7 外部7—2階持ち送り



写真8 外部8—1階持ち送り



写真9 外部9—1階隅木



写真10 外部10—菱葺き屋根



写真11 外部11—下見板と土壁

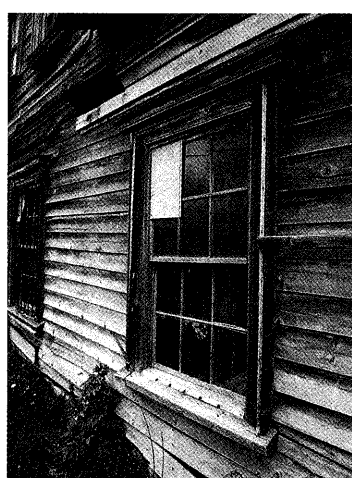


写真12 外部12—上げ下げ窓



写真13 外部13—戸袋

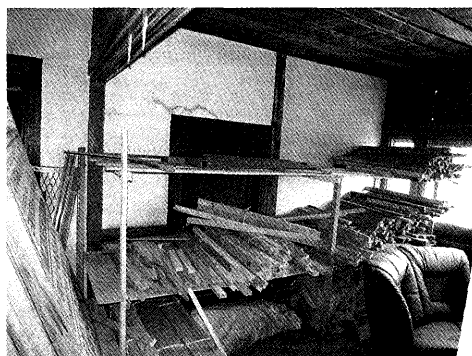


写真14 内部1—玄関ホール



写真15 内部2—和室3の欄間

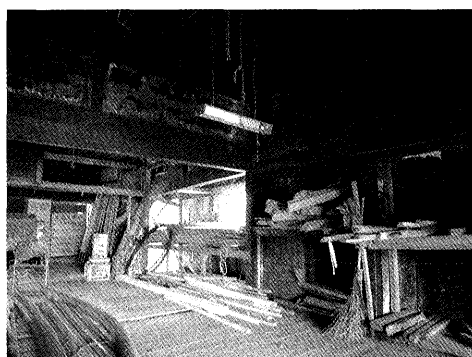


写真16 内部3—板間

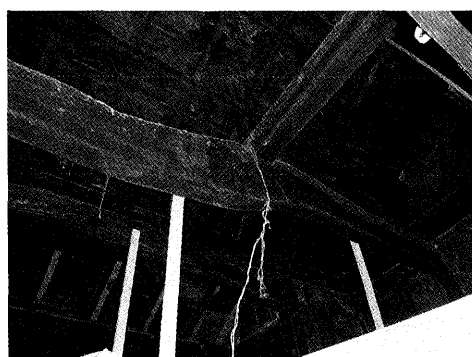


写真17 内部4—板間の天井

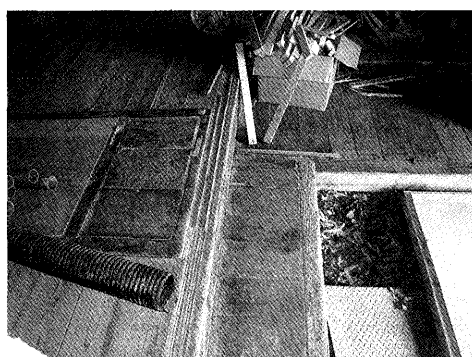


写真18 内部5—板間の囲炉裏

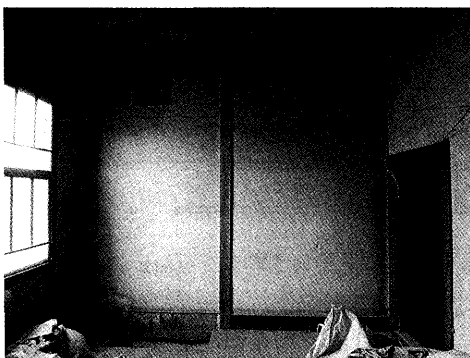


写真19 内部6—2階の洋室2



写真20 内部7—2階の洋室2の天井

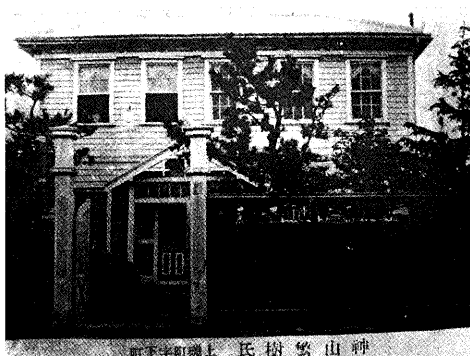


写真21 上磯町字下町の神山繁樹邸（絵葉書）

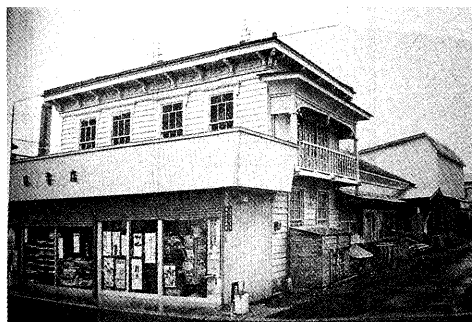


写真22 伊藤書店（出典：『渡島の古建築』）



写真23 木村邸（出典：『渡島の古建築』）

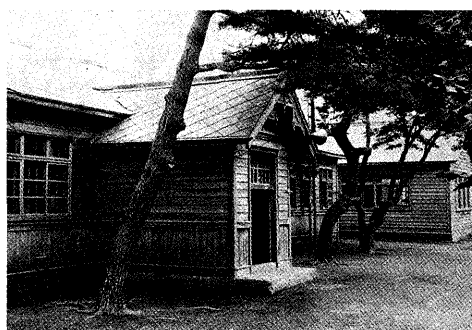


写真24 沖川小学校外観（北斗市沖川小学校所蔵）

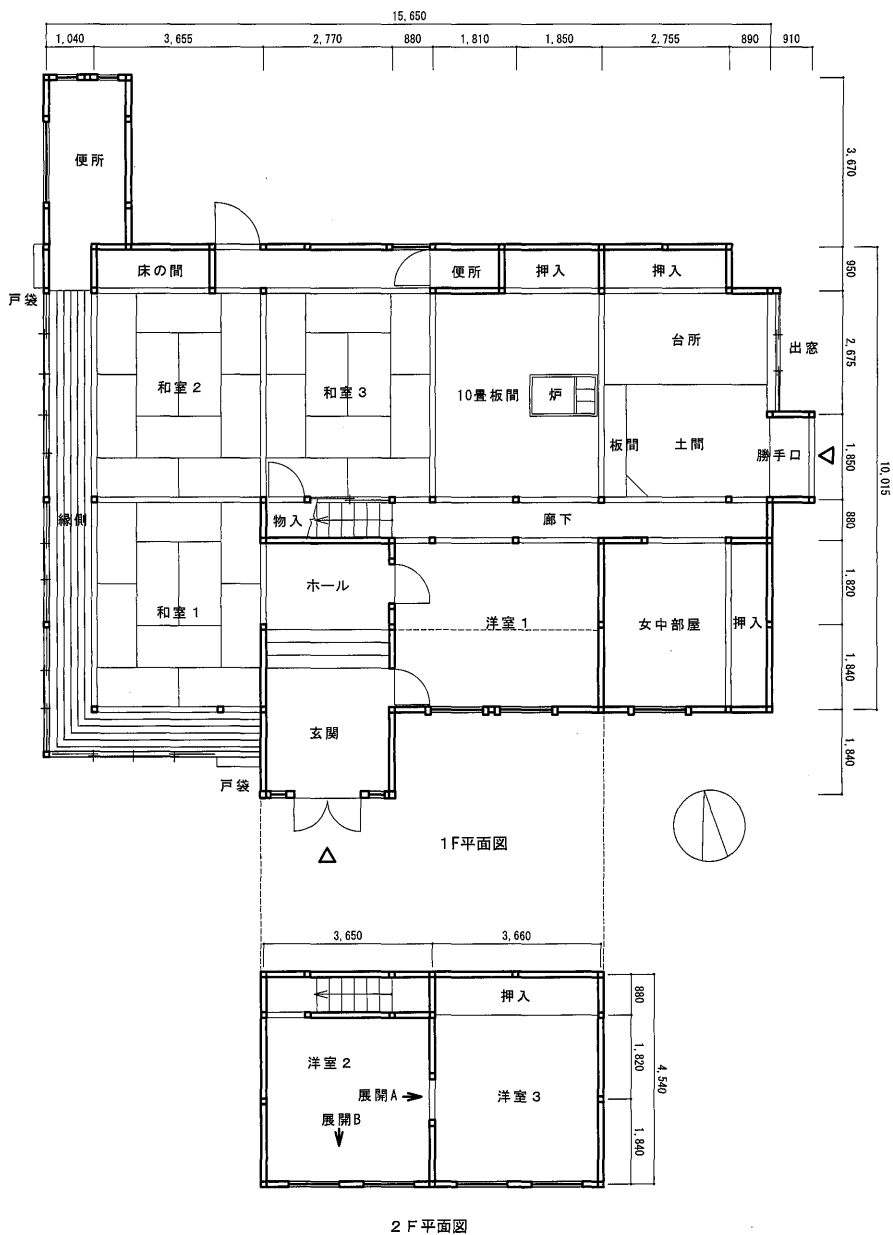


図1 神山邸平面図（川島智生による実測と作成）

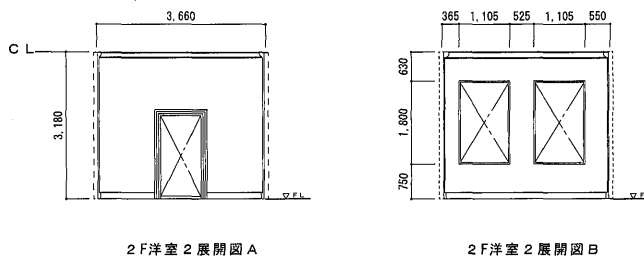


図2 神山邸洋室展開図（川島智生による実測と作成）

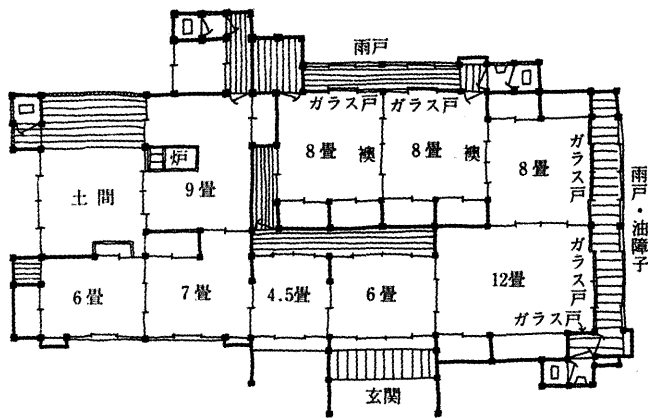


図3 ガラス邸平面図（出典：遠藤明久『北海道住宅史話』）

2章. 北海道の住宅のなかでの位置づけ

前章では、「外観の洋風化」の一方で、「伝統的な間取りの採用」という二点が結果として導き出せた。神山邸は北海道の住宅のなかではどのような位相にあるのか。

1節. 「外観の洋風化」

「カラー鉄板の三角屋根、大きな集合煙突、あるいは縁側のない家など、北海道の住宅には、こうした外観や形態的な面だけではなく、規模や間取りなど、その内部空間についても、本州他府県の住宅とはちがったいろんな特徴がある」⁶

とは、北海道大学教授をつとめた住居学者、眞嶋二郎が昭和57（1982）年に記した言説である。北海道の住宅を注意深く観察したことのある人であれば、ここに北海道住宅の際だった特質が端的に言い表されていることに気がつく。

この一文を読んで、筆者は昭和44（1969）年冬に最初に北海道を訪れた時の記憶を思いだした。41年も前のことだから、もはや心象風景に昇華しているものだが、そこで見た風景は白い雪景色のなかに、ペイント塗りの洋館が群として満ち溢れていた。なかにはペイントが塗られていない素地のままの仕上げのものもあり、またいずれもの建物も揃って石炭の煤で外観は汚れていた。あきらかに筆者の育ち、見慣れた関西の光景とは大きく異なっていた。極論をいえば、北海道に存在する建物は先住者であるアイヌの住居や昭和戦後期以降の鉄筋コンクリート造の四角い箱以外の建物はすべてが洋館にみえた。それほどに強いインパクトを12歳の少年に北海道の建築景観は植え付けた。

このことは神山邸の「外観の洋風化」という論点に深く関連する。つまり神山邸と同じく外壁が下見板張りにペイント塗りの洋風建築を北海道で筆者はきわめて日常的に目撃した。そこで見た住宅の多くは、外観の上で従来の日本に特有の伝統的なスタイルから大きく隔絶していた。その背景には北海道への移住が明治以降だったことで、その時にモデルになったアメリカなどの欧米の建物の影響を直接に受けたことによるとされる。その結果、「バタ臭い」建物が

出来上がることになる。全国的にみても、もっとも洋風色の強い景観の出現に繋がった。

神山邸に戻れば、洋風化の現象は壁の下見板や破風の飾り板、窓の開口法などにとどまり、和風意匠も持ち送りの装飾のように複数にわたり顔を出した。つまりは正確な意味での洋館ではなく、装飾面からみれば、擬洋風の延長線上にあったと捉えられる。そのような意味では神山邸を過渡期的な様相を示す一事例と位置づけることができよう。

北海道住宅史⁷をまとめた北海道工業大学教授・遠藤明久によれば、明治中期から大正期にかけては道内の庶民住宅に白ペンキ塗りの和洋折衷スタイルが大流行し、「切妻屋根、桎葺き、南京下見、上げ下げ窓の亜流スタイルが札幌を中心に広く建築される」⁸ という。これらの要素は神山邸の建築手法とも共通する。つまり広い意味ではこのような流れのなかにあったことが理解される。

2節.「伝統的な間取りの採用」

神山邸が建設される頃には、函館近郊の上磯ではどのような建築が建てられていたのだろうか。「東北・北陸の日本海沿岸に多い妻入り、通り庭形式の民家形態が、松前、次に述べる江差でも、明治中期ころまで、主流を占めて建っていたのである」⁹ とは、遠藤明久による言説である。「通り庭形式の民家形態」とは市街地に建つ町家の形式を意味する。

神山邸は市街地ではなく、田園のなかに建つ農村住宅であり、間取りについてはすでにみたように近代前期までの日本の住宅のスタンダードであった田の字型プランを踏襲したものだった。北海道での田の字型プランについては次のような定説がある。「北海道の農村住宅でも、戦前はいわゆる‘田の字型’の間取りが主流であった。(中略)しかし本来夏の暑さをしのぐため、外にたいして開放的なこの間取りは北海道の気候条件に適合するものではない、にもかかわらず戦前の農村住宅のほとんどがこの型の住宅であったのは、積雪寒冷という気候条件の中での生活や住宅生産技術の蓄積が少なかったことが最大の理由と思われるが、寒さにたいする配慮に欠けた」¹⁰ ものであり、大正期以降は徐々に用いられなくなる。そのような意味で明治中期に建設された神山邸が田の字型のプランに影響下にあった事由は理解される。

前節でみた白ペンキ塗りの和洋折衷スタイルの流行は、明治10(1877)年に札幌に建設の「白官宅」とよばれた爾志通洋造家に端を発する。そこでは「外形の洋風に対し、内部は和風を取り入れた折衷形式」¹¹ であった。爾志通洋造家は2階建てであったが、総2階建てではなく、一部分が2階建てになった住宅であった。すなわち2階部分は6畳と4.5畳の板間が2室と12畳の和室1室の計3室からなる。神山邸の2階もまた、総2階建てではなく一部であって、8畳の板間2室からなった。室数こそ異なるが、2階屋設置の形態にはある種の共通項が求められる。すなわち北海道の住宅は前述したようにアメリカなどの影響が強く外観に現れ出ているために、一見内地他府県の建築と異なり、従来の伝統的なものと断絶して誕生したものと思われるが、大正期頃まではプラン面では依然、伝統的な建物の延長線上にあったことが指摘できる。遠藤明久はそのことを次のように整理した。明治中期以降、北海道住宅がたどる道を「『内地型』住形式をできるかぎり残存しながら、洋風形式や手法を最小限度に受容してゆく」¹² というもので、神山邸が選択した。「伝統的な間取りの採用」とは、このことと符合する。

先の眞嶋二郎の言説を続けると、現代の北海道では「大きな居間を中心に部屋が集約され、全体がコンパクトに構成された居間中心型住宅は、都市はもとより農村でもよく見られる北海道の代表的な住宅様式」¹³ とある。その結果、現在北海道の住宅景観は「伝統的な和風様式（門構・塀・土間・縁側・塗壁・瓦屋根など）がいちじるしく後退し、シンプルなデザインやプラン」¹⁴ となった。その背景には明治後期から大正期にかけての間取りの洋風化があり、戦後の北海道庁が推進した防寒住宅への改良が関連する。

私事に及ぶ内容だが、先の1969年冬の北海道行きの際に滞在した住宅は、炭坑町赤平の炭坑住宅だった。41年前の記憶をたどりながら、臆気ながらその建物の間取りの輪郭を描くと、居間が中心に据えられたプランであって、台所とは配膳ハッチで繋がった。居間には和室が2室と洋室が1室連なっていた。さらに台所の奥には女中部屋があった。団地生活を送っていた筆者にとってはかなり広い家の印象が強い。住友石炭株式会社の赤平炭坑は昭和13（1938）年に創業であるから、この建物の建設は昭和10年代から20年代にかけて建設されたものと考えられる。

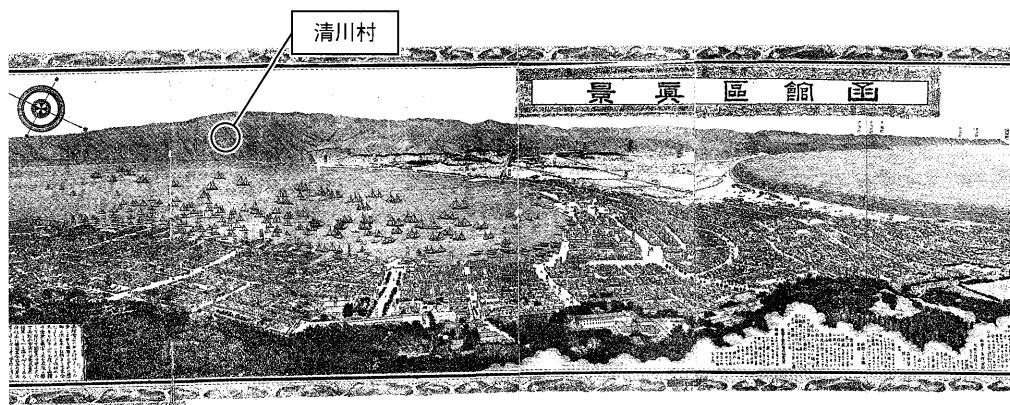


図4 『函館区真景』（明治24年）

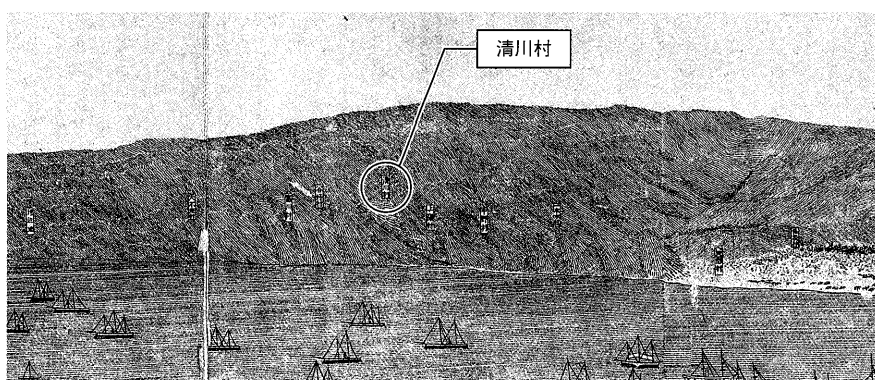


図5 『函館区真景』（拡大図）（函館市立図書館所蔵）

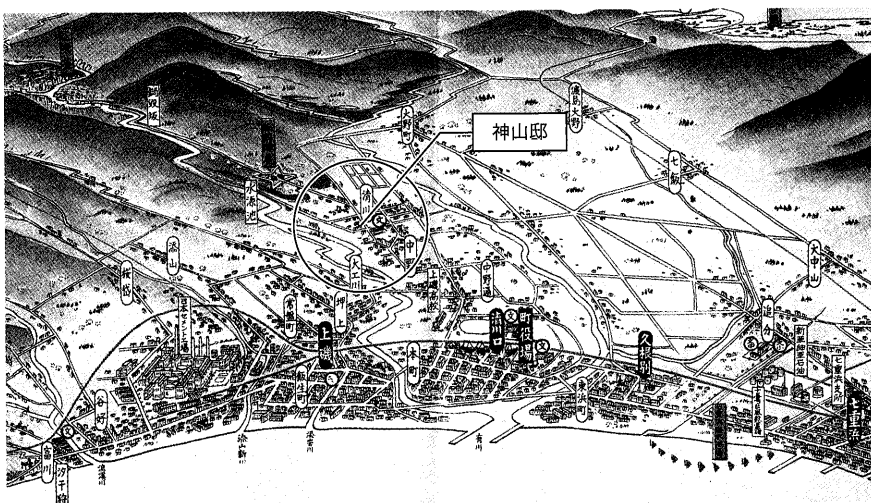


図6 上磯町鳥瞰図（吉田初三郎作成、函館市立図書館所蔵）

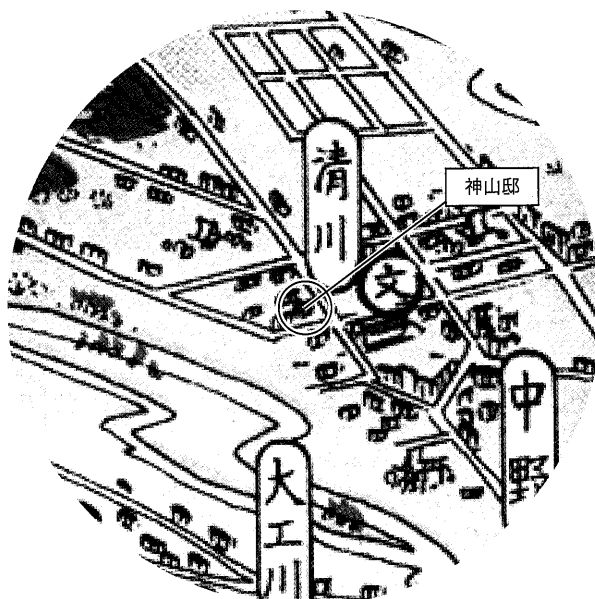


図7 上磯町鳥瞰図（拡大図）

3章. 上磯郡清川村

神山邸が所在する清川村とはどんな土地だったのだろうか。旧清川村は地理的には函館湾を挟んで函館市の北北東の方角にあたり、上磯町の旧市街地から北に約2kmの位置である。5年前の平成17（2005）年に北斗市となった。

その歴史は享保14（1729）年の地藏堂¹⁵設立にはじまる。宝暦2（1752）年には稲荷神社の設置が確認される。幕末の安政5（1858）年に但馬より多くの入植者を迎えた。明治19（1886）年には人口は516人を数え、現在2010年3月の458人より多かった。明治31（1898）年には人口

888人に達する。ちなみに上磯村は5,171人であった。明治33（1900）年に上磯村や中野村、谷好村、富川村と合併し上磯村となり、大正7（1918）年には上磯町になる。大正2（1913）年には清川村と隣接する上磯町と函館・五稜郭との間に上磯軽便線が繋がり、それは昭和6（1931）年には江差まで伸びる。鉄道敷設までは函館と上磯との連絡は船で結ばれていた。その様子は、明治24（1891）年に刊行された『函館区真景』（図4）に見ることができる。また大正4（1915）年に刊行された『日本案内』¹⁶によれば、「福山街道は函館より海岸に沿い、湾形を描きつつ一里余りにして上磯に達す地に、浅野セメント会社分工場あり、明治二十三年の創立に係り、規模広壮、産額また多し」とある。

清川村は北海道における水田発祥地（幕末）のひとつとして知られる広大な農地からなり、四稜郭ともいべき松前藩戸切地陣屋（1855年）¹⁷の麓に広がる。江戸後期には上磯町飯生町（旧戸切地）が会津藩の蝦夷地経営の拠点になっていた。

昭和30年頃の上磯町の様子は「上磯町鳥瞰図」¹⁸から一定の理解が得られる。神山邸はその図に描かれており、国道96号線に面し、沖川小学校、消防署、郵便局など、旧清川村の中心施設が集まる中心部に位置する。北東には清川寺が、さらに北東側には松前藩戸切地陣屋跡がある。

4章. 神山繁樹

1節. 函館へ

この住宅の施主は上磯村で農場を営んでいた神山繁樹だった。「数奇なる運命に駕して成功したる本道拓殖功労者」として、『北海道開拓五十年史』¹⁹に2ページにわたって顔写真入りで紹介されている。

神山繁樹の生涯を辿ると、嘉永2（1849）年に会津に生まれ、明治4（1871）年に24歳の時に函館に來た。会津藩士として、戊辰戦争時は次のように闘ったという。「偶々戊辰の役起るに逢うや好機逸すべからず、奮然躍起して宇都宮、日光、巳壬の激戦に馳せ参じ、屢々修羅の巷に馳驅して幾度か瀕死の危殆を陥りし事あり、然れども常に愛刀の爲めに勇氣百倍千菰（以下略）」²⁰

函館へ移住した経緯は「翁此の時年齢廿四志を樹て意を決して郷土を辞し 藩友佐川正と俱に蝦夷に航し函館に上陸す、干時明治四年七月なりき」²¹というものだった。会津藩士たちは戊辰戦争の結果、斗南藩（現在の青森県・岩手県の一部）に移住することになり、苦労を重ねる。神山繁樹はそのような中で、新天地を求め開港都市函館を目指した。最初牛肉店を開業し、成功する。その利益でもって、「同十四年に至り大黒町に壮大華麗なる洋館を新築し、爰に函館全市を飾るべき大ホテル、西洋料理店を開き、傍ら英、露、仏諸国の東洋艦隊の食料買込みを請負う、（中略）収むる所の利純巨額に及んで産大いに成る」²²。十年も経たないうちに、函館を代表する実業家のひとりになっていた。

2節. 清川村へ

「子孫百年の計を策し、上磯郡清川方面其他に農耕地数百町歩を購入せり、同十八年に至り

ホテル及び西洋料理店の営業全部を使用人磯村義廉に譲渡せり」²³とあるように、明治18（1895）年に、神山繁樹は函館を去り、清川村に移住する。47歳の時である。この時代でいえば、人生の黄昏期にあたる。骨を埋める覚悟をしたのだろう。会津出身者で、函館病院医者の関屋八太郎が上磯公立病院に派遣されており、関屋は彼方此方から会津出身者を上磯に呼んでいた。郷土史家の落合治彦²⁴によれば、神山繁樹は関屋八太郎に誘われたという。

入植後は自ら農作物の改良や造林事業を興す。その様子は「爾来開墾耕耘に従事し、自ら犁鋤の労働を事とし、農産物の改良を謀り、地方産業の発達に努力し、拓く處の田数百町歩に及ぶ」²⁵というものだった。

そして小作人五十戸を有したという。農場経営者として成功をおさめた。土地に根をおろした神山繁樹は地域に対して、村会議員や学務委員などをつとめ、様々な貢献をおこなっている。そのひとつが小学校の改築事業であって、次のように記される。

「曾て沖川小学校校舎改築の挙あるや、工事監督の任に膺り、此間自家の業を顧みず、而も私財を投じて匠工を慰藉督励して其工を速かならしめ」²⁶

沖川小学校は明治33（1900）年に移転して新築されるが、その外観写真からは神山邸そっくりの玄関妻部の装飾をみせる。共通してハンマービームを範とした意匠が用いられている。その理由は同一の大工棟梁による設計施工であったからと考えることができる。この大工棟梁は内地の棟梁であった²⁷という。この棟梁は写真22の伊藤書店を明治30年頃に建てていた。この建物は昭和46（1971）年まで71年間にわたって使用されていた。

神山繁樹は清川村の住宅以外に、写真21の上磯町字下町の自らの住宅²⁸（後に松本病院となる）ならびに、久根別にも住宅²⁹（旧塚田邸）を普請しており、いずれもが同じ棟梁であった



写真25 神山繁樹の写真（北斗市沖川小学校所蔵）

という。そのことは玄関妻部廻りをはじめ、窓廻り、軒下廻りの装飾が共通して極似している点からもうかがうことができる。

神山繁樹は昭和9（1934）年12月6日に亡くなった。享年87歳だった。神山繁樹は清川寺に眠っている。清川寺は生前、沖川小学校とならび、神山繁樹が改築に尽力した建物だった。神山繁樹が生前に深く関わった沖川小学校には神山繁樹の事跡がまとめられた次のような文献が残されていた。以下に記す。

「常ニ国家教育ニ熱心ニ居村沖川小学校ノ学事ニ関シテハ細大自ラ任シ、或ハ児童ヲ奨励シ或ハ父兄ヲ誡諭シ一意潜心常ニ致力ノ是ラサルヲ恐レ猶且校舍ノ狭隘ヲ憂ヒ校舍ノ改造ヲ案出シ、明治三十二年十二月其ノ設計ヲ為セシニ四千餘金ヲ要ス然レトモ学区内百四十餘戸ノ負担ニ耐ウル所ニアラス、茲ニ當局者ト協議シ該校有山林畑等ヲ估賣シ、全三十三年七月改築ノ工ヲ起スノ運ニ達セリ、此レヨリ氏自家ノ業ヲ抛チ、自ラ工事監督ノ勞ニ當リ、三月ノ久シキ能ク其ノ責任ヲ全フシ、或ハ私財ヲ散シテ匠工ヲ慰撫シ、全年十一月八日ヲ以テ工ノ竣ヒ移転開校ノ式ヲ挙クルニ至リ、復タ私財ヲ投シテ式典費ノ大半ヲ助ケ、蓋シ該校改築ノ切ハ氏カ力典ヲ大ナリト謂フ可シ、依テ此ノ美蹟ヲ表明シ永ク該校生徒並ニ父兄ノ記念タラシメントス

明治三十四年二月十一日

結語

以上の考察から、次の知見が得られた。

- 1) 旧神山繁樹邸とは、函館郊外の田園地帯に農場経営者の自宅として明治29（1896）年に建設された住宅である。神山繁樹は会津藩出身で明治維新直後に渡海して函館で成功した実業家であり、清川村（現北杜市上磯町）で約50戸の小作農を束ねた地主であった。
- 2) この建物は木造一部二階建てで、平面は田の字型プランの変形である。そこでは洋室が一階と二階に設置される一方で、床の間付きの和室が二間続いて設けられ、縁側が付くなど、和洋折衷案が試行されていた。玄関部は正面にむかい外部に突出する。一方便所は背面にむかい外部に突出する。また奥の板間には囲炉裏が設けられるなど、従来の手法がみられる。このように近世期に完成した本州の伝統的な住宅プランが根底にあったことがわかる。
- 3) 外観はオイルペイント塗りの下見板張りとなり、窓は縦長の上げ下げ窓、玄関屋根の妻部破風には木製の洋風意匠にもとづいた装飾が付き、軒裏は菱組仕上げとなるなど、全体には洋風意匠の影響が大きい。だが細部の造作をみると、持ち送りなど和風意匠にもとづくものもある。このように洋風を基調としながらも、細部においては和風が現れるなど、和風と洋風が混在している点に特徴がある。これは擬洋風のステック・スタイルとも捉えることができる。屋根は鉄板の菱葺き仕上げで、その形状は二階部分が寄せ棟、一階は一方が入母屋、もう一方が切妻となる。
- 4) 神山邸は内地の大工棟梁の設計施工によって建設されていた。神山繁樹は同じ大工によって、3軒の家を上磯町や清川村で普請しており、上磯町字下町の住宅と久根別の住

宅が挙げられる。神山繁樹が改築を担った沖川小学校も同一の大工によってつくられており、共通する意匠を示した。

謝辞

神山繁樹の曾孫にあたる神山茂郎氏、上磯在住の郷土史家・落合治彦氏、北斗市立沖川小学校の宇野正英校長、函館市中央図書館の奥野進氏、実測ならびに図面作成メンバーの川島美香氏、の各位には取材ならびに調査で大変御世話になりました。紙面を借りて謝意を表します。

註

- 1 北海道建築士事務所協会函館支部. 1992
- 2 北海道開道50年紀年として、1921年に鴻文社から刊行される。澤石太編による。
- 3 「神山繁樹と地域振興」『函館新聞』1998.12.27
- 4 レスター・ウォーカー『図説アメリカの住宅』三省堂. 1888
- 5 板ガラスを障子の一部に使ったということで、このようなネーミングになったという。遠藤明久『北海道住宅史話』住まいの図書館出版局. 1994
- 6 安達富士夫編『北海道の住宅と住様式』北海道大学図書刊行会. 1982. p. 31
- 7 遠藤明久『北海道住宅史話（上）』住まいの図書館出版局. 1994
- 8 前掲7)と同じ。p. 115
- 9 前掲7)と同じ。p. 30
- 10 前掲6)と同じ。住谷浩の執筆。p. 153
- 11 前掲7)と同じ。p. 111
- 12 前掲7)と同じ。p. 132
- 13 前掲6)と同じ。p. 31
- 14 前掲6)と同じ。大垣直明の執筆。p. 263
- 15 現在の清川寺
- 16 開国社刊行の『日本案内』正巻之上。p. 788
- 17 函館湾を見渡せる高台に築かれたもので、蝦夷地防衛を目的で幕府が松前藩に構築させた。その四稜郭の陣屋には17棟の建物があり、約120人が守備にあたったという。現在は国指定の史跡に指定される。
- 18 その制作年は判明しないが、京都市祇園、吉田初三郎と明記されており、吉田初三郎の作品のひとつであった。その鳥瞰図の中には、昭和27（1952）年設置の上磯高等学校や昭和31（1956）年開設の清川口駅が記されている。また吉田初三郎は昭和30（1955）年に死去していた。このことを総合して判断すれば、昭和30年代始めにつくられたものと考えられる。
- 19 『北海道開拓五十年史』1921年に鴻文社. p. 242～243
- 20 前掲19)と同じ
- 21 前掲19)と同じ
- 22 前掲19)と同じ
- 23 前掲19)と同じ
- 24 2010年3月、筆者による聞き取り調査を実施
- 25 前掲19)と同じ
- 26 前掲19)と同じ
- 27 『渡島の古建築』p. 78
- 28 平成10年代まで残っていた。
- 29 昭和30年代まで残っていた。

出典

- 写真1 外部1—全景 川島智生撮影
写真2 外部2—南東側外観 川島智生撮影
写真3 外部3—東側面外観 川島智生撮影
写真4 外部4—北背面外観 川島智生撮影
写真5 外部5—玄関破風飾り 川島智生撮影
写真6 外部6—勝手口懸魚 川島智生撮影
写真7 外部7—2階持ち送り 川島智生撮影
写真8 外部8—1階持ち送り 川島智生撮影
写真9 外部9—1階隅木 川島智生撮影
写真10 外部10—菱葺き屋根 川島智生撮影
写真11 外部11—下見板と土壁 川島智生撮影
写真12 外部12—上げ下げ窓 川島智生撮影
写真13 外部13—戸袋 川島智生撮影
写真14 内部1—玄関ホール 川島智生撮影
写真15 内部2—和室3の欄間 川島智生撮影
写真16 内部3—板間 川島智生撮影
写真17 内部4—板間の天井 川島智生撮影
写真18 内部5—板間の囲炉裏 川島智生撮影
写真19 内部6—2階の洋室2 川島智生撮影
写真20 内部7—2階の洋室2の天井 川島智生撮影
写真21 上磯町字下町の神山繁樹邸 川島智生撮影
写真22 伊藤書店『渡島の古建築』
写真23 木村邸『渡島の古建築』
写真24 沖川小学校外観 北斗市沖川小学校所蔵
写真25 神山繁樹の写真 北斗市沖川小学校所蔵
図1 平面図 川島智生による実測と作成
図2 洋室展開図 川島智生による実測と作成
図3 ガラス邸平面図 遠藤明久『北海道住宅史話』
図4 『函館区真景』 函館市立図書館所蔵
図5 『函館区真景』（拡大図） 函館市立図書館所蔵
図6 上磯町鳥瞰図 吉田初三郎作成、函館市立図書館所蔵
図7 上磯町鳥瞰図（拡大図）

（原稿受理 2010年3月26日）